

2015年
9月1日
No. 92
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり

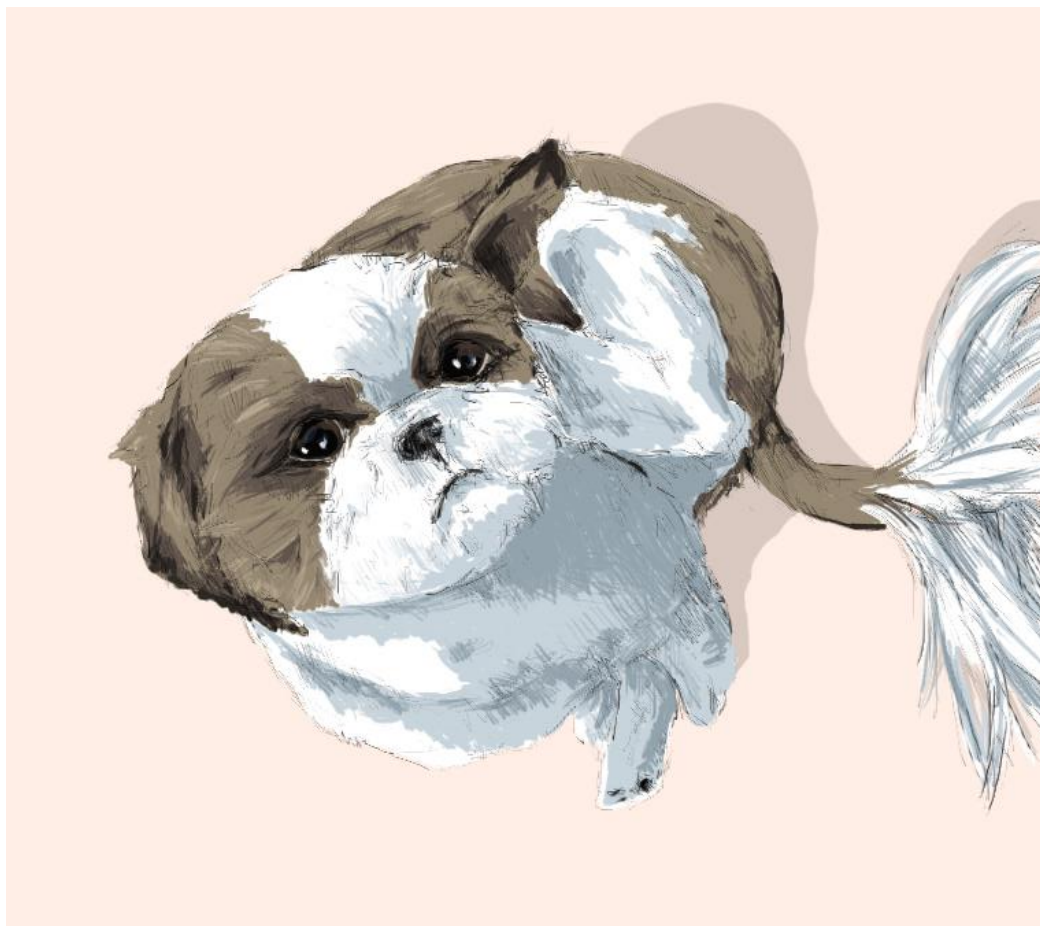


イラスト 高津達広

Index

- 2ページ LPF活動報告 盛夏の三角山登山 他
- 3ページ 多機能型事業所 ピアデザイン
- 4ページ 大人が読み解く「絵本セラピー」開催
- 5ページ 「ひきこもる心のケア」出版に際して
- 6ページ 書評「自立への漂流」坂本凌雲・著 他
- 7ページ 読者の声「あれから4年半をへて」 他
- 8ページ こちら事務局／編集後記



会報は札幌市さぽーとほっと
基金助成事業により作成され
ています。

SANGOOの会 盛夏の三角山登山

8月7日の初心者例会には、新規で参加された2名を含め合計5名の参加者があった。絵葉書によるアウト・リーチを受けた30代男性は、「普段楽しいと思うことが無く、人から絵葉書をもらうこと自体ないため、とても嬉しかった」と述べ、緊張の面持ちで現在に至る経緯を話していた。

7月30日に行われた三角山登山（写真1、2）に参加したAさんは、「自分のペースで登り、ストレス解消になった」。また初めて参加したBさんは誰よりも軽快に登り同行した田中敦理事長も驚いていた。

9月24日（木）には円山登山が予定されている。自然を楽しみながら日頃の脳の固着を緩めながら歩く。秋の季節にはぴったりの登山は、リラクゼーションに一役買うことだろう。



（写真1・上）麓から登山道に入る参加者

（写真2・下）頂上から札幌市内を望む

札幌学院大学でNPOの実践を紹介

7月9日、江別市にある札幌学院大学で、田中敦理事長が担当する講義の一環として、吉川修司理事が「ひきこもりピア・サポートの活動を通してみてきたこと」と題してNPO実践の報告を行なった（写真3）。

冒頭、吉川理事は、NPO法人NPO文化学習協同ネットワーク代表の佐藤洋作氏の言葉を引用しながら「ひきこもりの人たちは、自分というフィルターを通して、自分と世界をどのように関係づけるかに重心を置いているため、普通に就職している人より主体的に社会と関わろうとする存在。それだけに社会に出ていくことにも独特のこだわりがある」と述べた。

自分に何が出来るのかを考えた結果として一般的な就労とは違うNPOでの活動が続ける吉川理事もひきこもり経験者である。この経験を活かしてピア・サポーターとして当事者宅を訪問して6年目。

「6年も続ければ、このままで良いのか戸惑うこともある。社会は即戦力になる人材を



（写真3）

ひきこもりピア・サポートについて語る吉川理事

求めている。決してひきこもりに優しい社会ではない。そのような社会に出ていくために訪問支援を続けていることが正しいことなのかわからないが、当事者の中にはそのような社会へ出ていきたいと悩んでいる人もいる」と矛盾を感じながら活動続ける一方、「訪問先の当事者も私自身も、いかにして持続可能な生き方に転換できるかを考える仲間。当事者との関係をフラットにしていくことがピア・サポートでは大事」だと述べた。

この日講義を受けた生徒約50名は、緊張しながらも淡々と語る吉川理事の話に耳を傾けていた。

絵葉書によるアウト・リーチ実践研究

ひきこもりピア・サポーターがメッセージを添えた絵葉書が当事者宅に郵送される絵葉書によるアウト・リーチは、4月から実施。

8月末日現在、小樽不登校ひきこもり家族交流会・鈴木祐子代表が担当する30通を加え50通の絵葉書が当事者宅に届けられている。

田中敦理事長が郵送した絵葉書に感謝の言葉を述べた当事者や、絵葉書送付がきっかけとなり初心者例会に参加した方もあった。また、高津達弘さんのイラスト入りの絵葉書を受け取った方からは、御礼のお手紙をいただいた。仲間の心に触れる緩やかなアウト・リーチの成果が少しずつ花を咲かせている。

（7ページ参照）

PEER+design

多機能型事業所

ピアデザイン

9月9日、札幌市白石区にある障がい福祉サービス多機能型事業所ピアデザインを訪れた（写真）。ピアデザインは、運営する一般社団法人・北海道ピア・サポート協会代表理事の矢部滋也さん（社会福祉士、介護福祉士）とサービス管理責任者の稲垣麻里子さん（精神保健福祉士）が中心となり、主として精神障がい者を支える事業所として今年2月に開所した。事業所では就労継続支援B型とともに自立訓練（生活訓練）を行うコースも設定されている。そこに参加する利用者は基本的にスタッフと対等に事業所内の仕事を分担している。これは、1940年代にアメリカで発祥した精神障がいを抱える利用者とスタッフがともに事業を運営する『クラブハウス』に則った運営方式であり、同じくアメリカの精神的な困難を経験した女性が考案した「WRAP（ラップ）」と呼ばれる自己管理方法を取り入れ様々な生活上の困難を対処できるツールを採用しているところにピアデザインの特色がある。お話を伺った矢部さん、稲垣さんともに疾患による生活上の困難や生きづらさを抱えてきた経緯があり、その『生きづらさ』というピアな視点を持つ人たちが集まって生まれた新しい形の障がい福祉サービスといえる。



写真 事業所内のロビーにて。矢部滋也さん（左）と稲垣真理子さん

『仲間と一緒に自分の人生をデザインする』をコンセプトに事業所の名称を決めた矢部さんは、自身が生きにくさを感じてきた経験を活かしながら、「ピア・サポートからリカバリーにつなげていきたい」と述べ、利用する精神障がい者とスタッフが公平な立場で向き合える事業所運営を目指している。

今後の事業展開については、昨年に引き続き、こころのピアサポートフォーラムの開催や「家から一歩を踏み出せないとか、自宅と病院だけの往復だけの空間にいる人に対してアウト・リーチなどのアプローチを試みたい」と制度やサービスの型にはまりにくい人への対応も検討している。また、支援されるのではなく、自分が支援をするのと同時に支援をしてもらうという相互支援ピア・サポートの効用と、支援における対等性を主張した。

稲垣さんは、「WRAP（ラップ）」の研修会で矢部さんと出会い、その後団体の運営に参加。生きづらさを抱えてきた稲垣さん自身、全国のリカバリーフォーラムやピアスタッフの集いで多くのピア・サポーターやピアスタッフと出会い「元気をもらってきた」と話し、その元気の源が事業所運営に携わる礎となっている。

取材途中から事業所に通所してきた利用者で賑わう中、事業所内全員で行う朝のミーティングが開始され、その模様も見せてくれた。『いつ来ても良い』『自分の取り扱い説明書があると安心する』など15項目からなる『安心と安全のための合意』が掲げられた室内には10名ほどの利用者が中央のテーブルに座っていた。ホワイトボードに本日の予定を書きながら進行役を務めていた利用者の一人は、堂々とした面持ちで清掃や調理などの役割分担を決めていた。時折笑い声も聞こえ堅苦しくない雰囲気を出していたのは、スタッフの力だけではなく利用者全員から感じられる他に配慮する優しさのようにも感じられた。建物の2階が事業所で3階には北海道ピア・サポート協会の事務所兼多機能ルームも備えられ、幅広い活動に使用できるようになっている。ベランダにはミニトマト、しその葉、ゴーヤなどを栽培していた。この日の昼食のメニューで使用する取れたてのゴーヤが厨房に並べられていたが、どんな料理になるのか、食事づくりも事業所内での楽しみのようだ。

この日は矢部さんと稲垣さんの他、利用者も同席しての取材だったが、3人それぞれが時には譲り合いながら、補足し合いながらコメントをしていた姿にピアスタッフと専門職としてのスタッフが協調しながら上下の隔たりのない関係が築かれているように感じた

多機能型事業所 PEER+design ピアデザイン

住所：札幌市白石区本郷通 12 丁目南 4 番 15 号
土屋ビル 2 階（地下鉄東西線・南郷 13 丁目下車
1 番出口より徒歩 1 分）

TEL/FAX：011-595-7478

E-mail：design@hokkaido-peer.net

ホームページ：http://design.hokkaido-peer.net/

大人が読み解く面白さ 「絵本セラピー」開催

8月17日に行われた「SANGOOの会」では例会の前半を、元高校の体育教師で現在は道内各地で講演や絵本セラピーの普及を通してさまざまな人たちに元気を贈る「笑華尊塾」代表を務める塩谷隆治氏（写真）を迎えたセッション、幼児が読む絵本を題材に生きていくことの意義や、これからの展望を参加者それぞれが持っている純真さと向き合いながら考えていく「しおちゃんの絵本セラピー」が開かれた。

「書店の絵本コーナーで一人丸刈りの男が泣いていたら私だと思ってください」

笑顔で挨拶をはじめた塩谷氏は、日本で最初にひきこもった天照大神の話を皮切りに5冊の絵本を読み聞かせてくれた。

一冊を読み終えた後、参加者は2〜3人の小グループに分かれ、自分と向き合うための質問に答える。『あなたの好きなものは何ですか』『満足していることは何ですか』『単純な質問でありながらも普段から真正面から考えることが少ない参加者の面々は、戸惑いながらも答えを出していた。』

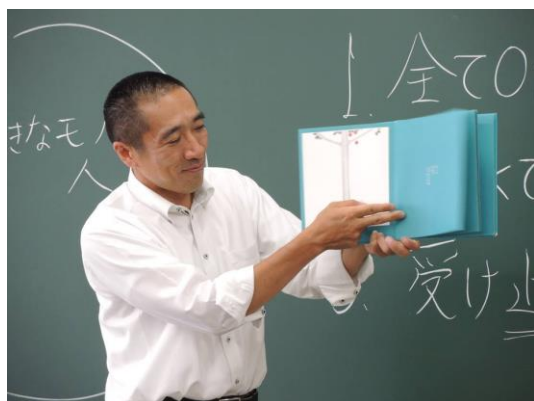
このようなグループシェアについての利点を塩谷氏は、「偶然隣に座っている人が、自分と同じものが好きだったり、考え方が同じであることで親近感を抱きつきかけにつながる。また、企業研修では、講師の話を一方向的に聞くだけではなく、グループ形式で参加者の中から最善の答えを導き出すところにある」と述べた。

より良いヒントを見ず知らずの隣人からもらえるとという柔軟な考え方が、「絵本セラピー」の根底にある。そしてグループを形成して自分が忘れかけていたものに「気付く」作業をしている。悩みや困りごとに対する回答は、既に関心する内側に答えが眠っており、その答えを導き出すための手引きとして絵本があるのかもしれない。

塩谷氏が話してくれた絵本の主人公たちの多くは、満たされない現状の中で懸命に自分を受け入れて生きている。足が一本少ない猫が主人公の話では、ケンカも弱いし、早く走ることができないが、早く走る猫には見ることができない何気ない日常を大切に生きようというメッセージが込められている。

「自己啓発ではなく、単純に自分の心と向き合い、感じてほしい。それだけです」と語る塩谷氏の素朴さが、参加者にも受け入れたためか参加者の感想では、「人に読んでもらうことで、絵本に描かれているイラストを眺める余裕もでき、より内容を理解する助けになった」「感動する自分に驚く」「（大人目線で読んでしまったため）素直でない自分を再確認できた」といった感想が挙げられた。

最後に塩谷氏は、「絵本は、分厚い心理学書や哲学書一冊を凝縮して綺麗なイラストとともに作者の想いが込められている。是非絵本を生活の中に少しだけ取り入れ、生きるうえでビタミン剤にしてほしい」と締めくくった。



（写真）笑いながら絵本を紹介する「幸せ連鎖プロデューサー」塩谷隆治さん

☆ブログ紹介

塩谷隆治の元氣アップ〜ココロのサプリメント〜 <http://hanatarou358.blog115.fc2.com/>

絵本「わたしはあかねこ」より

白猫の母親と黒猫の父親から生まれた一匹の猫は体の色が赤色だった。他の兄弟猫は、白と黒の毛色を受け継いでいるのに、自分だけ「あかねこ」として生まれた。

親猫は、「どうして赤色に生まれたんだろう」とため息をつく。「あかねこだけ兄弟と色が違って可哀そう」と周りは言う。でも「あかねこ」は自分のことを「きれいかわいい。みんなと同じじゃつまらない。黒や白にならなくてもいい。周りが私らしさをわかってくれないのは悲しい」とつぶやく。

今までのひきこもり本にはない新鮮な一冊 「ひきこもる心のケア」 出版に際して

杉本 賢治

このたび私がインタビュアーとして編集し、札幌学院大学の村澤和多里准教授監修によるひきこもり支援者・研究者へのインタビュー本、『ひきこもる心のケア——経験者が聞く支援の最前線』（世界思想社）が刊行される運びとなった。

この本はもとも、この通信会報誌『ひきこもり』の企画として2011年9月から2013年3月刊行の号まで専門家7人へのインタビューを底本としており、加えて監修者同行のもと、道外3名の支援者の話を含めた合計10人のひきこもり支援最前線の方々へのインタビュー記録であり、当団体の田中理事長にもご協力をいただいた。まずは改めて、この会報企画を通してくれた田中理事長、そして7人の先生方のインタビューに同行してくれた吉川副理事長に深く御礼申し上げます。

元々私自身が「ひきこもり」の当事者として自分を位置づけ、「SANG Oの会」という居場所に自らをアイデンティファイ（同定）できたことは、自分の安心網となり、心底ここで助けられたと感謝している。だが次に、「ひきこもり問題とは何だったか」という次元に思いが向かったのは、どこ

か潜在的な欲求であった気もする。団体がNPO化され、そこで行われた事業に参加させていただいた刺激もあったし、その過程やその後「ひきこもりとは何か？」を語り合う、世代を超えた友人とのたくさんのお話で一層培われ、その経験を得ることで次のステップとして、ひきこもり問題を考える研究者などにインタビューできる機会に恵まれることへとつながっていく。いま思えば個人的な「あがき」に近い欲求もあったと思うのだが、私自身が一層深く、そしてできるだけ客観的にひきこもり問題を考える契機として、これら専門家たちのお話があったのは間違いない。またもうひとつ、絶対付け加えないといけないのは、先生たちの誠意ある姿勢や優しさ、私の「人」への信頼の基盤となったことである。一連の活動の中で、人脈的なつながりを紹介してくれたのが監修者の村澤先生で、ご多忙中、今回の書籍化協力までずっと関わってくださいたのは言葉に尽くせぬありがたいことだった。

さて、本の内容についても少しだけ。これは乱暴な整理で大変申し訳ないけれど、ひきこもり問題を考えるとき、今までは領域の壁で相互に見落と

された部分が多かったように思う。ひきこもり問題は心理の領域では個人の問題に還元されがちだし、社会学では「可視化されない人」へ陥りやすい。そのため、制度的・学問的にエアポケットに陥りやすかった気がする。同様に、支援者、研究者、当事者、ジャーナリスト等の発言や活動も、それぞれの枠組みの中では深まりがあったと思うのだが、その領域間の橋を架けてはいなかったのではないか。この本は（結果として）学問的、社会的領域の壁を取りはずす取り組みが目指されており、今までのひきこもり本になり新鮮な一冊となったのではないかと

思う。本書は私のひきこもり体験からはじまり（序章）、支援者（3名）、心理学の立場（3名）、発達障害とひきこもり（2名）、そして社会的排除の観点から（2名）の計10人のお話を軸に、インタビューを終えての対論（終章）で締めくくる形。そんなひきこもり経験者が辿る旅の記録となっている。領域も少しずつ違うプロフィール、シヨナルな人たちの多角度のお話が、ひとつの何らか大きな「納得」へと収斂していくポジティブな流れを汲み取っていただければありがたい。

今回、いったん仕事を終えて思うことは、本書での専門家自身の新鮮な論考も含め、新しい取り組みとなったと

思っけれども、この一冊をケースとして、いっそう深く掘り下げる要素がまだ沢山あるのではないかとということ。本書を通じて聞くべき新たな内容が含まれている気もするのだ。自画自賛が過ぎたきらいがあるけれど、まずはこの本、一度手にとって一瞥していただければ幸いである。



村澤和多里・監修、杉本賢治・編集
世界思想社・発行、192ページ
定価（税込）1,944円

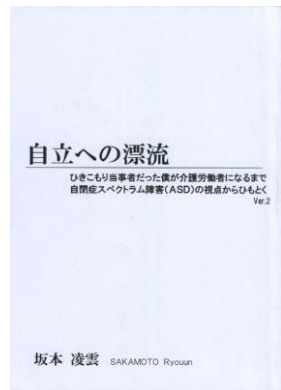
「ひきこもる心のケア」には、田中敦理事長へのインタビューも掲載されています。ぜひご覧ください。

編者の杉本賢治氏のブログ「インタビューサイト・ユーフォニア」では、精神分析医、大学教授、ひきこもり支援の実践者たちへインタビューが公開されています。

<http://ethic.cloud-line.com/>

書評

「自立への漂流」 坂本凌雲・著



東京中目黒で行なわれた「ひきこもりフューチャーセッション庵ーORー（8月2日開催）」では終わりに際してFBで知り合った東京在住の坂本凌雲さんとリアルタイムでお会いすることができた。その際、献本してくださったこれまでの自分史を綴った全298頁に及び集大成『自立への漂流』自費出版（頒価1000円）は読み応えがあった。ぜひとも多くの人たちの手に渡っていただければと思う。

本書で何よりも特記すべきことは、単なる自分史で終わることなく、あるときは専門書から、またあるときは尾崎豊、徳永英明、佐野元春などの著名なミュージシャンの歌詞を巧みに引用し関連付け、これまでの経験を限りなく客観視しつつ自分の歩んできたリカバリーストーリーを真摯に向き合い語っていることに尽きるといえるよう。筆者とは同時代を生きてきた著者であ

るだけに自分と重ね照らし合わせながらじっくりと読むことができた。

「ひきこもりの年数が長いことが果たして自慢できることなのだろうか？」との問いかけからは、ひきこもりが他者から評価されるものではなく、自らの貴重な経験値として理解することが何よりも大切であることを改めて再認識できるものである。著者がひきこもりから福祉系の大学にすすみ、編集者を目指して就職した印刷会社で働き、転職を繰り返し、非正規労働の世界を歩み、再び福祉の領域に戻っていくストーリーからは、「自分探し」をやめ、「社会が必要としていること」にシフトしていく「切り替え」と「決断」。その姿は、今日生きにくさを感じる多くの人たちに勇気を与えるものに違いない。

本書の中で「ひきこもりからの自立」というものは、単に「ひきこもり状態」から抜ければ終わりではない、大変なのはそこから先なのである、と述べられているが、その語りからは一人の人間としての生きざまを強く感じる。自立とはさまざまなプロセスであり、それを支えているものは仲間であり、同僚であり、周囲の多くの人たちである。そうした関係性から私たちは歩み続けているのである。その意味で本書は幾たびか加筆修正されている。おそらく著者が示す着地点は新たな

歩みの出発点でもあり、本当の自立とは最後の最後まで人生はわからない自分たちの漂流ストーリーといえないだろうか。筆者はそんなことを思い浮かべながら著者のさらなる活躍と同時に、この続編に期待を寄せていきたい。なお本書の情報は事務局まで。

（田中 敦）

新たな助成金事業がスタート

10月・健康づくりイベント開催

平成27年度公益財団法人北海道新聞社会福祉振興基金助成金事業として実施する「北海道中高年ひきこもり就業準備支援事業」がスタートした。ひきこもりの長期・高齢化に伴い、社会参加するチャンスが徐々に減少し、ひきこもり期間が就労を阻む大きな障害になりやすい。彼らの失われた自信の回復を促進し、社会へ踏み出す勇気をつくりだすことを目的に「健康づくり」「学び直し」「中間的就労」を中心とした事業を実施する。

「健康づくり」としては10月19日（月）でインストラクターの作田文字氏を迎え「第1回コンディショニング&リラクゼーション」（8ページ参照）を、「学び直し」として11月9

日（月）日本アフィリエイト協議会幹事部で株式会社だいきすラボ代表の近藤愛氏を迎え、アフィリエイトについての見識と在宅ワークへの可能性を深める学習会を北海道立道民活動センターかでの2・7で開催する。当事者経験者優先で参加可能。参加希望者は事務局まで。

来年1月に旭川市で

「道産こもり179大学」開催

公益財団法人北海道地域活動振興協会・平成27年度ボランティア活動支援事業助成金を得て「道北旭川圏当事者会活動フォローアップ支援事業」を実施する。同事業は、前年度、旭川市内に当事者会を創設する事業を行ない、今年2月から発足した自助会「NAGAI」が今後も継続発展できるように当NPOが協同的に支援するもので、来年1月に地元の当事者との交流会並びに「道産こもり179大学 in 旭川」を開催する予定である。

本事業では、実績を持つ札幌の自助会と旭川の自助会との有機的な情報交換を重ねることで、地域に潜在化しているひきこもり当事者の更なる発見と掘り起しに努め、当事者会への誘導を促進するねらいがある。詳細は決まり次第ホームページにて公開する。



読者の声

あれから4年半を経て

あの時、一瞬の地震がヒドイことになるとは誰もが驚いたか！

私は、2011年3月11日金曜日にある施設に向かう途中に、一瞬揺れ動く感触を味わった！まさに地震だった！あのいまわしき、福島原発の激しい火災と大量の放射能、地震による津波での被害、散々な結末だった。言葉を失うほどのヒドイ悲劇だった。これだけの被害を受けても、懸命に生きる福島県民、復興支援のためにチャリティーで集めた募金活動など、心のあたたまる支援、感動する場面がありました。残念ながら、これだけの惨劇の中で、壊れたATMからお金を拾うバチ当たりの行動を起こす人も見られた。氣力を失い、仮設住宅で亡くなる人もいた。

まだまだ、忘れてはいけない惨劇を胸に刻みながら、生きていけないといけない。辛い現実の中、体育館で避難した子供たちの週刊少年ジャンプをまわし読みする光景、食料品を与えたりする支援者、まさに、助け合い精神が詰まっていた！いい光景を目の当たりにした！

手紙(絵葉書)によるアウト・リーチ希望者募集

「ひきこもりピア・サポーターによる手紙を活用した効果的なアウト・リーチ実践研究」(平成27年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成事業)では当事者が作成した絵葉書などを週1回のペースで外出が困難な当事者の手元にお届けいたします。実施期間2016年3月末日まで。希望者は事務局までご連絡ください。

☆寄贈御礼

事業の主旨に賛同していただいた有志の方から未使用の切手100枚と絵葉書50枚を寄贈していただきました。当事者へ郵送する絵葉書や切手に使用させていただきます。



まだ4年半という感覚で小さな支援を集結して、どんどん復興支援をしたい気持ちになった。なんでもかまわないので、協力してもらえ方はいろんな力タチで支援して、復興を願います。

(30代男性)

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO 法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail: info@letter-post.com

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり者が社会に出た時、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解いただき、ひきこもり者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

会費

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000 円	入会金 1,000 円	一口 1,000 円～
年会費 3,000 円	年会費 2,000 円	

◆「SANGOの会」例会のご案内

2015年10月は下記日程にて行ないます。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、下記の期日とは別に例会を設定しますので、事務局までメール、電話でお問い合わせ下さい。

10月19日(月)のSANGOの会(初心者の集り)は、前半「コンディショニング&リラクゼーション」を開催します。10月23日(金)のSANGOの会は、通常のSANGOの会終了後、「ひきこもりの思いを語る～川初真吾×池上正樹トークセッション」を開催します。

と き：2015年10月19日(月) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：北海道立道民活動センターかでの2・7 6階 和室研修室「樹」

場 所：札幌市中央区北2条西7丁目 (JR札幌駅南口から徒歩13分)

と き：2015年10月23日(金) 午後1時30分から午後5時00分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター 4階 視聴覚兼会議室

場 所：札幌市中央区大通西19丁目 札幌市社会福祉総合センター
(地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)

参加費：無料 参加条件：ひきこもり当事者または経験者とその家族

参加方法：直接会場へお越しください。(事前申し込みは不要です)



◆「ひきこもりリフューチャーセッション」とプレ企画「ひきこもりの思いを語る～川初真吾×池上正樹トークセッション」の開催

ひきこもり当事者と親や親族との間にある相互不信感を解消し、ひきこもりの人たちの未来をどのように切り開いていくか、新しい働き方や生き方とは何かをファシリテーターの協力のもと一緒に考える「ひきこもりリフューチャーセッション」(平成27年度公益財団法人フランスベット・メディカルホームケア研究・助成財団助成金事業)を開催します。一般社団法人COYOTE代表理事の川初真吾ディレクターを筆頭に、ファシリテーターとしてジャーナリストの池上正樹氏、NPO法人グローバルシッパスこうべの森下徹氏、ひきこもりリフューチャーセッション庵IORIファシリテーターの岡田早苗氏が参加します。リフューチャーセッションの開催前日には、一般公開のプレ企画として「ひきこもりの思いを語る 川初真吾×池上正樹トークセッション」を実施します。

ひきこもりリフューチャーセッション

と き：2015年10月24日(土) 午後1時00分から午後5時00分まで

会 場：北翔大学北方圏学術情報センターPORTO 5階 会議室A・B

場 所：札幌市中央区南1条西22丁目1番1号 (地下鉄円山公園駅下車5番出口から徒歩5分)

参加費：無料 参加対象：ひきこもり当事者及び家族、支援者など

参加方法：必要事項記入の上、10月17日(土)までにEメールまたは、FAXで申し込む

ひきこもりの思いを語る～川初真吾×池上正樹トークセッション

と き：2015年10月23日(金) 午後3時30分から午後5時00分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター 4階 視聴覚兼会議室

場 所：札幌市中央区大通西19丁目 (地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)

参加費：500円(当事者は無料) 参加対象：ひきこもり当事者及び家族、支援者など

参加方法：直接会場へお越しください。(事前申し込みは不要です)

☆ 編集後記 ☆

今年度の秋も諸事業が目白押しです。多くのひきこもり当事者たちが全国各地で活発に実践を展開しています。まさに当事者の時代がやってきているといえます。私たちピアの人たちが積極的に社会に発信し続けアクションをしていくことによって停滞した今の世の中に变革が必ず起こっていくことでしょう。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無 断 複 製 は お や め く だ さ い